

出題のねらい

㊦は、杉本苑子『散華 紫式部の生涯』からの出題です。本作は、紫式部とその周辺をめぐる事績をもとに、作家的想像力を豊かに盛り込んで紫式部の生涯を綴った小説です。出題箇所は、「小市」(紫式部)が自身と友人である「御許丸」(和泉式部)との文学的資質の異なりを厳しく認識し、劣等感を持ちながらも自らを鼓舞するくだりです。二人の本質的な相違や小市の微妙な心情が的確な表現によって細やかに描出されています。それらを丁寧に読み解くことがポイントになります。

㊧は、源俊頼の著わした歌論書『俊頼髓脳』からの出題です。十一世紀前半に活躍した歌人能因法師に関する説話的文章を出題文としました。話は二段落に分かれ、前半部分は能因法師自身の行動をエピソードとして語っています。先行する歌人や作品への敬意を常日頃から忘れず、ひたすら歌に生きようとする能因法師の姿を描いた部分です。後半部は、そうした能因法師の残した名作に関わる地へと出立する旅人を送別する宴での歌人達の会話を描いた説話となっています。ここでは、会話の発言者が誰であるかを読み取ることが後半部読み解きの重要なポイントとなってきます。

㊨

【解答】(50点)

問一	a 約束	b 相違	c 即興	d 欠如	
	e 噴出				(2点×5)
問二	X ウ	Y オ	Z ア		(3点×3)
問三	イ				(3点)
問四	嘘と本当、現実と非現実のあいだを自在に浮遊して、罪悪感などを持たない奔放な点。				(7点)
問五	(最初) 言い回～(最後) ている				(4点)
問六	I ウ	II ア			(3点×2)
問七	渴れることのない泉				(3点)
問八	ア×	イ×	ウ○	エ○	(2点×4)

【解説】

問一 比較的よくできていました。中には、b「相違」の「違」を「異」・「意」、d「欠如」の「如」を「除」、e「噴出」の「噴」を「憤」・「墳」とするケアレスミスが見られました。

問二 空欄の前後の文の論理展開をおさえて、最も適当な接続の語句を選んでください。空欄Xの前後には、御許丸をめぐるエピソードが具体例として並べ

られていますので、「あるいは」が適当です。空欄Yの直前には御許丸の性質が述べられ、直後にはその御許丸の性質を小市が全く持ち合わせていないことが述べられています。逆説の接続詞「しかし」が適当です。空欄Zの直後の一文は、「～からであった」と結ばれ、理由が述べられています。理由を述べる際に用いる「それというも」が適当です。

問三 傍線部の直前の部分に着目します。折々の御許丸の発言の齟齬・矛盾が述べられ、「御許丸にすればそのどちらもが本気なのだから」のくだりからは、御許丸自身に相手を騙したり巧みに取り繕ったりする意図のないことがわかります。したがって、「騙す」や「巧みに表現」が当てはまりません。「折々の感情を素直に表現したもの」という捉え方が最も適当です。そのため、彼女の言葉に「真実が宿っている」のです。だからこそ、「かえって始末が悪い」のです。

問四 傍線部の「そんな」の指し示す内容を説明している箇所を探します。傍線部の直前にあります。「嘘と本当、現実と非現実のあいだを自在に浮遊して、さして罪悪感など持とうとしない奔放さ」の部分が該当します。さらに「～奔放さは、まったく小市には欠けた資質だった」とされていることから、小市のうらやみがわかります。該当部分はそのまま抜き出すと、問題の字数制限を超えてしまいます。そのため、「さして」や「～うとしない」等の表現を調整して、「～奔放な点。」とまとめると条件に合います。

問五 「小市の性格が具体的に示された部分」なので、具体的な言動をあげている部分を探します。傍線部の数行あとに出てくる「見たこと感じたことを、三十一文字にまとめあげる」は和歌を詠むことを表します。その際に小市が「言い回しの細部を気にしてあれこれいじっている」とありました。当該部分が、「こせこせと、ささいなことにこだわりすぎる」小市の性格を具体的に端的に示した部分です。

問六 空欄の前後の文脈を把握して、小市の心情の推移に見合う選択肢を選びます。空欄Iの直前には、小市が御許丸の歌に「天成の才」を見出し、将来の発展の可能性を大いに感じていることが述べられています。これに対し、空欄Iの直後には、「気持が、小市は暗くならざるをえない」とされ、自身の詠む和歌を「凡作」と認識して、落ち込む小市の心情が述べられています。空欄Iには、御許丸から自身へと小市の認識が移っていくことを表わす言葉、御許丸と自身とを比較する言葉が入ります。空欄IIの直前には、小市が自身の「才能の欠如」を認識し、

一般入試／国語(前期)

苦しい思いでいることが述べられています。空欄Ⅱの直後には、「自身を、小市は鼓舞する。～自分の内部にも、渴れることのない泉があると信じよう」と、可能性を信じて前向きに生きようとする小市の決意が述べられています。諦念ではなく、未来の可能性を信じようとする心情を表わす言葉が入ります。

問七 「比喩的に言いかえた」という点がポイントです。「渴れることのない泉」が正解でした。この問題はとてもよくできていました。

問八 小市の抱いた「感情」は、傍線部の直前までの一連の叙述から読み取ります。あらためてどのような「感情」が記されていたのか吟味してください。アは「深刻な敗北感」が当てはまりません。小市は御許丸の歌の才能を羨望していますが、自身の中の可能性を諦めたわけではありませんし、完璧に敗北したとは思っていません。「自分の内部にも、渴れることのない泉があると信じよう」と、前向きな思いを抱いています。イは「家風による強い重圧の自覚」が当てはまりません。「わが家は詩歌の家すじ……。せめて生きた証を、その伝統の中で輝かしたい」と、小市は家の伝統を、「重圧」ではなく、むしろ自身を支えるものとして捉えています。ウの「疑心」「不安」「閉塞感」は、「八方塞がりの息ぐるしさ」等の本文から読み取れます。エは、前掲の「わが家は～生きた証を、その伝統の中で輝かしたい」から、読み取れます。



【解 答】(50点)

問一	ね	(2点)
問二	ウ	(3点)
問三	iウ iiカ iiiア ivエ	(3点×4)
問四	①イ ②ア	(3点×2)
問五	どうして牛車に乗ったままで通り過ぎてよいでしょうか。	(8点)
問六	歌枕	(3点)
問七	立ち	(3点)
問八	ウ	(5点)
問九	和歌を好む人	(5点)
問十	イ	(3点)

【解 説】

問一 漢字の読みを問う問題ですが、旧暦に関連する古典文化に関する知識も必要な設問となっています。月の満ち欠けを基準にする旧暦には、十干

十二支を組み合わせた文化も重要な要素となっています。古典時代の人々の暮らしを支えた旧暦の知識は、古文を読解する上で重要な要素となることもあります。しっかりと学習しておきましょう。

問二 古典文法についての知識と思考力を問う問題です。助詞・助動詞などの付属語は、どのような語形に接続するかで識別が可能です。a、b、dが、いずれも活用語の連用形に接続していることに気がつければ、体言に直接接続するcとは異質であることにも気がつきます。さらに、体言にサ行変格活用動詞が直接接続することで動詞化していく事例が多いことを覚えておきたいところです。日常から古文に親しんでいれば、すぐに正答を見つけられたことでしょう。

問三 引き続き古典文法に関する知識と思考力を問う問題です。順接の接続助詞「ば」は、活用語の未然形に接続する場合と已然形に接続する場合とでは、構成する条件法が異なります。古典文読解には必須の知識と言ってもよく、是非とも学習しておいてほしい重要ポイントです。

問四 語句の解釈を選ぶ、思考力や判断力を問う問題です。①は、能因法師の日常の所作が、何か根拠のあるものなのか、周囲の人物がはかりかねている描写が後の②に関連する文脈にも出てきます。①と②に対する理解をもとに、前半の段落全体の読解ができているかどうかとも問いました。

問五 「いかでか～む」の疑問文形から、これが反語表現であることに気がついているかを問う、思考力、判断力を要する問題です。反語表現は、疑問文と同じ文型を取りながらも、何かを強調することに文意の重点が置かれます。これは文脈全体に依存するため、これが反語であることに気がつくことで、説話の全体の展開にも理解が届きます。前半段落を読み解く上では重要な一文でした。また、反語によって強調されている文意を現代語で表現する力も問うています。

問六 古典和歌に関する知識を問う問題です。「歌枕」は、その地を詠む名作が基盤となり多くの歌人や作品に歌われるようになった名所をあらわす言葉です。和歌浦や松島など、時代を超えた文学者達に愛された地も多く、継承されたイメージが新しい作品を生み出していくといった文学世界独特の現象も見られます。

問七 三十一文字で表現をいったん完結させる和歌には、掛詞は欠かせない表現技法です。二重文脈の存在に気がつくかどうかの思考力を問う問題です。ここでは「霞が立つ」と「都を発つ」の重なりが、出発点を過去の一点とする効果を生んでおり、眼前に広がる白河関の風景とそこに吹く秋風の描写とが時間と空間の広がり、そして、現在と過去との遠い隔たりを表現することにつながっています。

問八 主語の明示されない文脈の中で、発話者に注意しながら会話の進行を読み取れているかどうかを選択肢形式で設問しました。思考力と判断力を問う問題です。白河の関を通過するに際しての作法を説く人物への問いかけは、直後の返答によって明かされています。前半段落で読んだように、先行する作品やその作者に日常的に敬意を払い続けた能因法師の名作に関連する地だからこそ、とその理由が示され、二つの段落を繋ぐ契機ともなる発言が、この問いかけによって導かれているわけです。

問九 全編が和歌と名作、歌人に関わる内容で一貫していますので、解答は容易だったと思います。それを、的確にまとめる思考力と簡潔に表現する力を問いました。

問十 文学史の知識を問う問題です。「西暦九〇〇年頃」と「勅撰和歌集」がヒントになります。万葉集はその成立事情が明確ではなく、勅撰であるかどうかは定かではありません。残る四歌集は、その成立時期を知っていれば、正答を得ることは容易であったと思います。上代から中世初期にかけては、文学者と言えば歌人を指していました。特に平安時代の文学の流れは、ほぼ半世紀ごとに編纂された勅撰和歌集と結びつけた学習が効果的です。

【現代語訳】

能因法師は、和歌を話題にする時も、うがいをしてから話し、歌書類を見る時も、手を洗ってから書物を取り広げたそう。ただ、単にその時の思いつきでしているのかと思っていたけれど、讃岐の国の前の国司の兼房という人が、能因を牛車の後ろに乗せてどこかへ行ったときに、二条と東洞院の交わる場所は、かつての有名歌人伊勢の家であったが、子日の小松があったのを、先端の枝を結んで植えてあったのが、成長して実に大きな松の木になっていたが、その木の梢が見えたところで、(能因が)牛車の後ろからあわてて降りたので、兼房はわけがわからず、「何事ですか」と尋ねたところ、(能因は)「この松の木は、世に名高い伊勢の結び松ではございませんか。そのような和歌に縁のある松を、どう

して牛車に乗ったままで通り過ぎてよいでしょうか(いや、よくありません)」と言って、そこから遠くまで歩いて通り過ぎて、梢が隠れてしまう程の距離になってはじめて、牛車に乗ったと言うことだ。

また、右近の大夫国行という歌人が、陸奥の国に下向した時に、歌人達が集まって饞別の会をした時に、(ある人が)「白河の関を過ぎる日は、せめて水で鬢の毛をなでつけきちんと整え、打衣くらい着て通り過ぎなさいよ」と、(国行に)教えたので、(国行は)「どういうわけで、そのようにしなければいけないのか。土地の人が、集まって見るのか」と問い聞いたので、(その人は)「いや。あの能因法師が有名な「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」と詠んだような関においては、私用の旅であっても、鬢の毛をぼさぼさにして乱れたままで通り過ぎなさってよいだろうか(いや、よくない)」と言ったので、人々は笑ったということだ。そうであっても、「和歌の道を好もうと思われるのなら、そのようにしてはじめて、良い歌を詠むことがかなうのだろう」とも申しあげたそう。だから、和歌を好むような人は、末世に至っても、(能因法師の逸話を)謹んで受け入れなければならないのであろう。